慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H· ルフェーブル著 大崎平八郎訳 レーニン : 生涯と思想
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.2 (1964. 2) ,p.182(80)- 183(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19640201-0080
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640201-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

H・ルフェーブル著　大崎平八郎訳
『レーニン――生涯と思想――』

マルクスやエンゲルスの伝記はかなり多く、メーリンクをはじめ古典的なすぐれたものが多いが、レーニンについては、権威のあるものとしては、クルプスカヤ夫人の「レーニンの想い出」やソ連邦共産党中央委員会附属、マルクス・レーニン主義研究所の「レーニン伝」などが有名である。ここに紹介を試みるルフェーブルのレーニン伝の原題は、「レーニンの思想を認識するために」（Pour connaître la pensée de Lénin, 1957）であり、すでに「カール・マルクス――その思想形成史」（ミネルヴァ書房、一九六〇年）をはじめ、幾多のマルクス主義思想にかんする研究をもって定評ある著者の力量にふさわしい労作であると思う。

訳者が「あとがき」でのべているように、本書の著者ルフェーブルは、ハンガリー動乱の際の言動によって、フランス共産党から活動停止処分をうけ、ついで一九五八年、大胆なスターリン批判によって、除名されたといわれるが、それにもかかわらず、彼のレーニンにたいする理解はなみなみならぬものがあり、その批判も内在的で充分な説得力をもっている。

つぎのような内容から成っている。

序文
第一章　レーニン主義の歴史的諸条件
第二章　レーニンの生涯
第三章　レーニンの哲学思想
第四章　レーニンの経済思想
第五章　レーニンの政治思想

三章以下が本書全体の三分の二の分量をしめ、その重要性を物語っている。すなわち第三章のレーニンの哲学思想については、(A)問題、(B)世界観としてのマルクス主義、(C)唯物論と経験批判論、(D)『哲学ノート』、(E)ヘーゲルの『論理学』に関するノートの五つの項目にわけて論じており、マルクスの史的唯物論の上に立って、マルクス主義哲学の混乱――弁証法におけるあれほどの強調にもかかわらず、論理学や方法論や弁証法にかんするまとまった論説といえるようなものは、ひとつも書きのこしていなかったというような――を整理し、レーニン主義を体系づける過程を、『哲学ノート』や『論理学』に関するノートについて観察している。

つぎに第四章のレーニンの経済思想については、(A)経済的社会構成体、(B)不均等発展の法則、(C)レーニンの経済思想と革命の三項目から成り、資本主義発展の不均等法則の把握から、はじめは、少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義でも可能であるとする一国社会主義の理論が導き出されることを強調している。最後に第五章のレーニンの政治思想においては、プロレタリアートの独裁の理論のロシアにおける具体化について克明に分析している。レーニンの政治思想は極度に確乎不抜なものであると同時に、驚くべき柔軟性をもっている。原理においては確乎不抜であり、その適用にあたっては柔軟であった（三二五頁）と著者がのべているように、レーニンが社会主義革命達成におけるプロレタリアートの階級的本能や彼らの自然発生性を重視すると同時に、ブルジョア・インテリゲンツィアの高度の政治意識（「近代の科学的社会主義の創始者であるマルクスとエンゲルス自身も、その社会的地位からすれば、ブルジョア・インテリゲンツィアに属していた」）との有効な結びつきと、小ブルジョア大衆すなわち広はんな農民層をプロレタリアートの周囲に結集させるためのレーニンの努力について語っている。レーニンによれば、理論と実践における統一が、よってもって支えられるところのものは、第一にはプロレタリア前衛の自覚によってであり、革命にたいする彼らの献身、彼らの忍耐、自己犠牲、英雄精神によってであるが、第二に党の活動を可能にするものは、《プロレタリア的な勤労大衆と、しかじまた非プロレタリア的な勤労大衆とも結びつきを保ち、彼らと接近し、そう言いたければ、ある程度まで彼らと溶けあう能力》であるというのであるが（四二七頁）、要するにルフェーブルは本書において、まさしく、《未曾有のくるしみと犠牲、比類ない革命的英雄精神、信じられないほどの根気とひたむきな探求、学習、実践による試練、失望、点検、ヨーロッパの経験との比較の半世紀》ののち、ロシアの大衆がマルクス主義を理解し、真の革命理論として学びとった過程を、レーニンの生涯と思想を分析するなかで追求しているということができる。簡単な紹介では、到底つくすことができないが、最近における真によみごたえのある研究のひとつである。（ミネルヴァ書房・一九六三年刊・B6・四七八頁・九六〇円）

―飯田　鼎―

＊　＊　＊

高須裕三著
『福祉国家の動向』

この本の一番いい点は、あくまでも実証的に、社会保障の意義を追求していることである。

「福祉国家」というテーマは、しばしばイデオロギーとしてとりあげられ易いが、実は社会保障の生みだした、きわめて経験的な果実である。氏はこのことに着目し、独自の社会保障論を展開する。従来、社会政策・社会保障は、資本主義の労働力保全として、労働力の維持培養のためにおこなわれるものという見解があったが、現代の社会保障はもはやその対象を組織労働者に限っている。これは明らかに大衆社会における国民各層の実力化である。しかも医療保険も現金では浪費されるおそれがあるので、現物給付としているため、そこには金銭勘定を越えた倫理的要請が付加され、生存権原則実現の推進力になる。ここに年金給付のごとく骨抜き的圧縮はなく、常に予算以上に保障が実現されていく。

氏はこのような観点から、福祉国家を、団体的平等主義の第一段階から、個別的自由的要素を加味した第二段階に進むものとする。欧米の豊富な実証とあいまって迫力のある書である。因みに氏は昭和十六年本塾を卒業、現在、日大教授である。（誠信書房・A5・二四〇頁・七五〇円）

―加藤　寛―

＊　＊　＊

山岡亮一・福富正美訳編
『資本主義への移行論争』

本書は「封建制から資本主義への移行」の問題を扱ったソヴィエト歴史学界の動向を伝える論文八編を選び編纂したものである。

第I部の第一～三論文は故コスミンスキーの筆になるもので、第一論文「一三―一四世紀のイギリス農村における階級闘争」は、近時注目されているアメリカの社会学者ホマンズの著書「一三世紀のイギリス村落民」The English villages in the 13 th Century, 1942をとりあげ、「諸世紀のなかでもっとも偉大な世紀であった一三世紀の「均衡」と「安定性」の破られたのは、「中世的宗教と道徳の堕落」という社会の「疾病」によるとするホマンズ社会学の反動性を批判し、ドッブ「資本主義発展の研究」やヒルトンの諸研究をこれと対比し、「均衡」し「安定」せる封建制の内部矛盾と崩壊の経済的原因を紹介している。ドッブのいう農民経営の「牧畜型」と「農業型」、